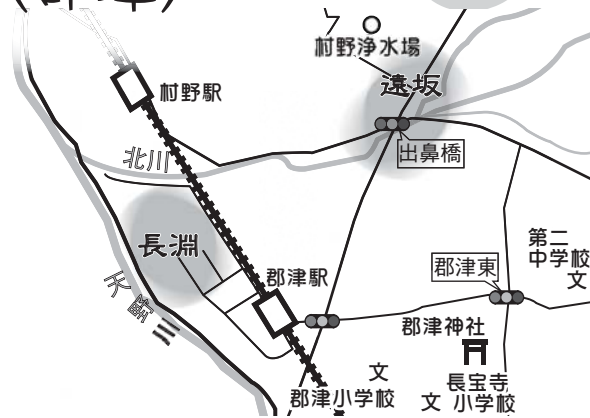


まちの名に歴史あり

(郡津)



交野には面白い・変わった地名が数多くあります。その由来については、はっきりと分かっていないところもありますが、いろいろな言い伝えが残されています。

今回から、交野の昔に思いをはせながら地名にまつわるお話を紹介していきます。

問い合わせ 文化財事業団 (TEL 893・8111)

こうづ 郡津

今は郡津と書きますが、江戸時代の中ごろには「郡門」と書いて「こうづ」と読むことが一般的でした。「郡」とは8世紀に施行された国郡里制の郡を指しています。つまり交野郡の役所があった所を意味していると伝えられています。

その中心地であった郡津神社の付近からは、白鳳時代の瓦が出土しており、役所があったのではないかと考えられています。というのも、当時は瓦ぶきの建物は、大きな寺院や役所に限られていたためです。

ながぶち 長淵

今の府営交野松塚住宅あたりが「長淵」です。北川が天野川に流れ込む手前の低湿地で、団地が造成される前は、京阪電車交野線の西側にアシの生い茂った水路や池がたくさんありました。ちょっとした大雨が降ると、この付近は水がたまり、水面が広がっていました。現在は団地が立ち並び、当時の面影はなくなっています。



松塚ふれあい館前に設置された歌碑

ここに残されている言い伝えは、色好みで文才に長けた美男子として都で評判の交野の少将が、鷹狩をしたときに交野郡司の館に泊ると、その郡司の娘が交野の少将に一目ぼれしてしまいます。

しかし、恋多き男である少将が郡司の館を再び訪れることはなく、ただ月日が過ぎていくことに絶望した娘は長淵へ身投げを決意します。

娘は自分の着物の端を引きちぎり、淵のそばを通りかかった鵜飼の男が灯していたかがり火の墨で着物の端に辞世の歌を書きつけ、それを少将に渡すように鵜飼の男に言い残して長淵に身を投げました。

かつきゆる うき身のあわと成りぬとも 誰かは問はん 跡の白波
『風葉集』巻14・恋4



郡津駅から枚方方向を望む(昭和39年)

来て・見て・触れてむかし探検最終回の答えは、次のとおりです。旧石器時代②、縄文時代③、弥生時代③、古墳時代①、飛鳥～奈良時代①、平安時代③、鎌倉時代③、戦国時代①、江戸時代③、明治～昭和時代②

とのおさか 遠坂

文字通り遠い坂です。東高野街道が郡津の地を離れ、枚方市の村野、春日、四辻へ抜けていく道があります。出鼻橋を渡ると一段高い台地上に上がります。

昭和30年代までは、道の東側はうっそうとした竹やぶで、西側は芋畑でした。昼でも薄気味悪く、おまけに坂の上り手に、郡津と村野の墓地があり、夜などは一人で歩けないほどで、太平洋戦争前までは山賊が出たという話も聞きます。今では村野浄水場ができ、竹やぶは取り払われて枚方工業団地に、墓地周辺も住宅地になり、昔の暗いイメージはすっかり無くなってしまいました。